

総合人間学素描

中 谷 英 明

〔要 旨〕

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「総合人間学の構築」は、五年来、フランスの人間科学館（パリ）と共同して、人文社会科学の新分野としての「総合人間学」の構築に努めてきた。未だ構築作業は続いているが、これまでに明らかとなった限りの、総合人間学の主要な特徴をここに記しておきたい。

総合人間学は、他の人文・社会科学と同じく、論理性と実証性に基づく点においては、科学であると言ってよいであろう。¹しかし現在確立し、広く世に行われている人文・社会科学とは、次の点において異なっていると考えられる。

(1) 有益性と文明的総合性

人にとってよりよい生とは何か。これは人類が地球上に現われて以来、絶えず自問してきた問いであろう。他の幾つかの科学と同様、総合人間学もこの問いを問う。ただし、知を断片に放置することなく総合を試み、またただ観察し記述するだけではなく、もろもろの知の有益性・実効性を重んじ、場合によっては実際に経験することをも辞さない。

総合人間学は真偽を検証する実証を重んじる。実証的知識は、今日の科学技術が示すように、有効であり、またしばしば有益であるから。しかし実証性に閉じこめることはない。その機序が科学的に未解明である知識の応用にも関心を寄せる。例えば、シャーマニズム、儀礼、あるいは宗教一般の諸活動から結果する事象も積極的に研究対象とする。もちろんシャーマンは、意識的であれ無意識であれ、荒唐無稽なことを語る。あるいは宗教教義は、例えばこの宇宙に天国、地獄、祖霊が生きる世界などが存在する

とか、ある人が処女から、あるいは母の脇腹から生まれたなどと科学的には認めがたいことを事実として教える。しかしこれらの宗教は、信じる人々に癒しや精神的活力を与えることからすれば、決して無益なものではない。

このような事象は既に、人類学、社会学、宗教学、哲学等が研究を行ってきた。しかしこれら諸学は、事象の有益性を評価する基準として研究者個人の価値観を暗黙の前提としていることがしばしばである。グローバル化が進展した今日の世界において、価値観は人ごとに異なり、文明ごとに異なっている。そうであれば、暗黙の価値観によってなされる評価はおおかた恣意的なものとなることは避け難いであろう。

かつて一つの世界の中の標準的価値観を提示したのは宗教であり、哲学であった。神道、儒教、ヒンドゥー教、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教などのいずれか一つの文明圏にいる限り、共通の、謂わば「普遍的な」価値観が存在した。しかしグローバル化した現代世界では、

1 フランスの人間科学館は十年来「人文・社会科学の脱ヨーロッパ化」を目標の一つに掲げて来たが、その研究主体がほぼヨーロッパ人に限られるという状況であった。総合人間学に関するAA研との学術協力協定は、このような背景によっても望まれたものである。

宗教、非宗教、科学主義、ニヒリズムなどの種々の異なる立場と絶えず遭遇することになる。

近代人文・社会科学がヨーロッパにおいて確立され、今日においてもヨーロッパが主導的立場にあることからしてこの評価の「基準」を作る価値観は、多くの場合、西欧的である。評価基準が真に普遍的なものとなるためには、上に記した諸世界やその他の世界の価値観を総合したものである必要があろう²。

こうして総合人間学は、事象の最も広い視野から評価した有益性に対して、実証性と同じ重要性を認め、知の文明的総合性を希求するものである。

(2) 生物学的総合性

知の総合性を求めるならば、文明的総合性ととも、生物学的総合性をも求めなければならないであろう。人の価値判断を左右する情念は、三局面を通じて形成されと考えられる。すなわち、1) 遺伝的局面 (génétique)、2) 後遺伝的局面 (épigénétique, 受胎から12才頃まで)、3) 離遺伝的局面 (apogénétique, 12才頃以降)、であり、それぞれ前の局面が後の局面の発達基盤となっていると考えられる。

遺伝的局面と呼ばれるのは、ヒトの脳形成が遺伝子的にプログラムされているからである。例えば、ヒトと鳥類のみが小脳を特に発達させ、鳥類は飛行、ヒトは二足歩行という、複雑系によって制御される特異な運動を手に入れた。ヒトと鳥類のみが言葉を発声することができるのは、この複雑系運動制御のおかげである³。他方、有名なフィネアス・ゲージの不幸な事故以来、ヒトにおいて最も最近になって発達した前頭前野の喪失は、言語能力に何の変化も与えないことが知られている。この二事実を突き合わせる

ならば、言語能力は、十万年ないし二十万年前に出来上がったとされる狭義の言語よりもずっと古く、二足歩行の開始頃から準備され始めていたと考えてよいであろう。他の動物の二足歩行より約四割のエネルギーを節約できると言われる複雑系制御によるヒトの二足歩行は、百ないし二百万年前から発達し始めた。言語に関わる能力は今日想定されているより遥かに古くから人の認知・表現能力に関わってきたと考えられる。そうとするならば、宗教の多くが、とりわけシャーマニズムや儀礼宗教が、言葉の発声を特に重んずることも理解されよう。人にとって何がよりよい生であるかを考察する際に、このような視点から言葉の発声や歌と人の幸福感との関係を検討する必要があるであろう。

上述の前頭前野を喪失したフィネアス・ゲージやその他の人の例は、さらに一つの事実を示唆する。人の持つ責任感や思いやりなどの情念が、前頭前野の働きに関わることである。⁴ 人はその進化の過程で形成された自然的性質に沿った生き方によって幸福感、達成感を獲得できるとするならば、よりよい生を求めべきは、このような前頭前野の働きを活性化させる方向であろうと予測することができるのではあるまいか。

後遺伝的局面に関しては、外国語習得の例がわかり易い。およそ12歳以前に習得した言語は母語となり得る。しかしそれ以降に学習した言語はそうならない。同様のことは、人の文化的意識(「常識」と呼ばれるもの)の形成についても言えるであろう。そうだからこそ文化的に異なる人々の間の相互理解は困難なのである。

宗教間、あるいは文明間の対話は、母語が異なり、母語しか知らない人どうしの対話と同じほど困難なのである。このことを考慮するなら

2 フランスの人間科学館は十年来「人文・社会科学の脱ヨーロッパ化」を目標の一つに掲げて来たが、その研究主体がほぼヨーロッパ人に限られるという状況であった。総合人間学に関するAA研との学術協力協定は、このような背景によっても望まれたものである。

3 中田力「人間の条件—脳科学の知見から」『総合人間学叢書』第2巻pp.9-16. 2007年3月、参照

4 Cf. Fuster, J. (2008). *The prefrontal cortex*. London, UK: Elsevier.

ば、文化伝統の異なる人々の相互理解には、外国語の十分な習得に要するほどの時間、すなわち数十年を要するとしても当然であることが理解される。

いま一つの例を挙げるならば、幼時に虐待された子供の治療は極めて困難であり、脳神経回路に異常をきたしている場合には殆ど不可能に近いと報告されている⁵。文明間対話や少年兵士などの問題に対処する際には、このような事実をも視野に入れておく必要があるであろう。

離遺伝的の局面に関しては、人がそれぞれに持つ世界観を例として取り上げよう。動物行動学者によれば、生物は常に環境世界の理解につとめており、周りで起こっていることが理解できたときには満足あるいは安心し、そうでない場合は不安に陥ると言う。ヒトもホモ・サピエンス・サピエンスとなって以来は⁶、神話などの世界観を持とうとし、それによって世界を「理解」してきたと思われる。この世界観は、言語を獲得したことによって格段と複雑なものとなったが、その機能そのものは、「安心させる」という古くから受け継がれたものであると推定される。

最近の比較神話学の成果は、最古の神話が十万年前のアフリカまで遡るものと推測している⁷。人は、遺伝的、後遺伝的な過程を通じて形成された認知能力をも包含し、離遺伝的過程において格段に発達した言語によって紡ぎ出された、複雑な世界観を持つことによって安心を得る動物であると言えよう。

このように考察するならば、今日の世界にお

いては、グローバル化した世界と、人の自然的性質とにふさわしい、新しい世界観が必要とされていること、それを構築することの重要性が認識されよう。

(3) 相互参照性と共同作業

上に述べた文明的総合性と生物学的総合性という二つの総合性を確保することは、易しい作業でないことは明らかである。それでは最も確実な、また人のよりよい生に有益な情報をいかにして集約するか。このために総合人間学は二つの方法を提案する。

先ず第一に、リフレクシヴな方法である。初めに重要な情報を収集する基準を定め、その基準によって情報を集める。次にそれを吟味して総括する。その総括に基づいて基準を手直しし、新しい基準によって情報を集め直す。これを繰り返す。これは古典的な方法であるが、人に関する考察においては、時間と労力がかかりすぎると判断されたのか、実行されることが少なかったと思われる。

第二に、これを実行するためには、あらゆる分野の研究者が共同考察する場を作ることが望ましい。文明事象に関しては、古典学、人類学、社会学、哲学など、生物学的事象に関しては、脳神経科学、動物行動学、精神科学、考古学などの研究者が参集する場が必要であろう。異なる領域の専門家が互いの知識を交換するには、対面して会話することによって初めて、他の研究者の知識を我が物とし、自己の研究に用いている概念を変えるべき新たな視点を獲得するこ

5 Cf. Steinlin (2007). "The cerebellum in cognitive processes: Supporting studies in children." *The Cerebellum* (6), 237-241.; Martin H. Teicher, Wounds that Time won't heal: The Neurobiology of Child Abuse. in *Cerebrum* (Dana Press), Vol.2, No.4, pp. 50-67; Fall 2000.

6 ホモ・サピエンスに属する可能性のあるホモ・サピエンス・イダルトゥに関しては、White, Tim D.; Asfaw, B.; DeGusta, D.; Gilbert, H.; Richards, G. D.; Suwa, G.; Howell, F. C. (2003), "Pleistocene Homo sapiens from Middle Awash, Ethiopia", *Nature* 423 (6491): 742-747, 2003. 参照。彼らが言語を話したかどうかは不明。

7 Cf. Michael WITZEL, Out of Africa: The long journey of the oldest tales of humankind, *Generalized Science of Humanities*, Vol. 1, pp.21-65. Tokyo, July 2006.

8 これに関する理論的考察が、第1回パリ・ワークショップのテーマとなった: *Ecologie des transferts épistémiques dans la constitution d'une Histoire de l'Humanité*, 25 et 26 mars 2007, MSH (Paris). 詳細は総合人間学サイト参照: <http://www.classics.jp/GSH/workshop>

とができる⁸。

研究者のみならず、政治家、官僚、企業人などの参加も、総合人間学の視野を拡大し、社会に対する何らかの提言を行うために必要であろう⁹。

このような諸専門家の共同作業は、確実に重要な情報を迅速に収集し、それをリフレクシヴに検討するためには不可欠である。急速な、根本的な変容を繰り返す現代世界にあって、今求められているのは、このような総括の迅速さであろう。

(4) 実践する学としての総合人間学

総合人間学が希求する目標はさらにある。人の行為がその意識を変え得ることは周知の事実である。例えば、スポーツ選手、修行者、宗教者らは、行為を通じて自分の感情や意識を変える。総合人間学は、これら専門家たちが自らの経験について記述するところを、古典学、人類学、社会学などと同じく局外者として理解しようとするばかりではない。必要な場合には、それらの専門家の実行するところを自らも実践して経験することを厭わない。このようにして、実践者にのみ獲得される「内面的事象」すなわち意識をも考察の対象とする。こうして総合人間学は、実践によって新たに獲得された意識に基づいてさらに考察を先に進めることができる。

社会に対する貢献を目標の一つとする総合人間学は、教育、心理療法、宗教実践等も、それらが青少年、病人、信仰者等の心を変えるという点に着目して、考察の対象とする。教育に関しては、総合人間学は、青少年に必要な教養や、自省や自律的思考を要請するリフレクシヴな思考原理を提供するばかりではなく、自ら実践し、

経験することによって自分の精神性を変えることが可能であることを知らしめる。

より一般的には、総合人間学の社会貢献は、人々に、単なる観察によるばかりではなく、実践経験によって獲得された重要な知識とその総括を提供することである。これらの知識は、現在の人文科学の枠組みに規制されて殆ど知られていないか、初めて知られるものであり、高度の有用性を持つと考えられる。

学術面における貢献としては、総合人間学は、諸学において現在用いられている概念や研究の方向性に変革をもたらし、新しい体系構築の糸口を与え得ると期待される。

総合人間学は、一定の体系的理論を応用に移すという意味での応用科学ではない。直接対話の方法によるリフレクシヴな方法を用い、重要情報を集約し、種々の実践を提案する。その俯瞰的世界観に基づいて、総合人間学は現代世界が直面する深刻な問題の解決も考察の対象とする。例えば総合人間学研究に参加している世銀の元副総裁ジャン＝フランソワ・リシャール氏は、緊急に解決を要する20の世界的重要懸案を20年以内に解決する方法を提案している。それは専門家からなる国際委員会を設置し、それが世界の政府や国際機関、企業等の政策を評価し、場合によって批判する、という方法である。これは実行可能で有効な解決法であり、今日の世界の急速な変容速度に対応する迅速性をも備えていると考えられる¹⁰。

*

総合人間学は、単なる知識の総括に留まらず、それを用いて人にとってのよりよい生を実現する方策を考察してゆくであろう。例えば、世界人権宣言（1948年国連総会採択）や、国際人権規約（1966年採択）などに宣言された社会的規

9 Cf. JF Rischard (Banque Mondiale) 氏の論文 (op.cit n.7) 参照。François Taddei (INSERM, Paris) 教授も、青年の教育活動実践に関する報告を第2回パリ・ワークショップにおいて行った：'Consciousness from View Point of Geneticists and Evolutionary Biologists', « *Formation of Consciousness, Change of Cognition* », MSH, Maison des Sciences de l' Homme, 2 & 3 avril 2009.

10 Cf. JF RISCHARD, Desperate Times Require Out-of-the-Box Solutions, *Generalized Science of Humanities*, Vol. 3, pp.7-13. Tokyo, Janvier 2008. Voir notre site web: <http://www.classics.jp/GSH/book/03.html>

範は、真に文化的に普遍的な条件を備えている
とは言い難く、不十分さが否めない。総合人間
学は、上述の方法によって、最低限の社会規範
の考察にも貢献することができよう。

総合人間学の構築は、「全球化」が諸文明の
頻繁にして緊密な接触を促し、大小の紛争を生
起させている現代世界において、急ぐべきこ
とと思われる。相互不理解、文化伝統の喪失、
狂信的教義への回帰などが払拭されない世界に
対して、総合人間学は、種々の精神伝統を生か
した、常なる刷新を行う「多様な伝統の一々の

さらなる発展とそれらの共存の方策」を模索し
てゆくであろう。

総合人間学は、人の生物的、文化的条件の正
確な認識に基づき、人の遺伝的、後遺伝的、離
遺伝的な条件にふさわしい、よりよい生を希求
することを、最終目標としている。

*本研究遂行にあたり、国際文化交流事業財団（東京）
の補助を受けた。ここに記して謝意を表する。

G GENERALIZED SCIENCE OF HUMANITY SERIES

総合人間学叢書

Vol. 5

Brief Communications

YOSHIRO IMAEDA,

The Encounter of Buddhism with Europe. (in Japanese)

Aperçu et programme du premier Colloque SGH à Paris, Paris, 25-26 mars 2008 :

"Ecologie des transferts épistémiques dans la constitution d'une Histoire de l'Humanité"

Program of the 5th International Symposium on GSH, Tokyo, 24 January 2009 :

"Forming Consciousness, Changing Cognition For Our Better Global Community"

Prospectus and program for the Second Paris Workshop on GSH, Paris, 2-3 April 2009:

"Formation of Consciousness, Change of Cognition"

Articles

HIDEAKI NAKATANI,

Ébauche d'une science généralisée de l'homme

MICHAEL WITZEL,

Change of Consciousness in Siberian and South Asian Shamanism

JEAN-LOUIS DESSALLES,

In praise of resemblance: Human communicational universals as basis for mutual acceptance

DOMINIQUE LESTEL,

L'étude des communautés hybrides homme / animal à l'interface de l'éthologie et de l'ethnologie



GENERALIZED SCIENCE OF HUMANITY SERIES

総合人間学叢書

Vol. 5

Brief Communications

Yoshiro IMAEDA,

The Encounter of Buddhism with Europe. (in Japanese)

Aperçu et programme du premier Colloque SGH à Paris, Paris, 25-26 mars 2008 :

“Ecologie des transferts épistémiques dans la constitution d’une Histoire de l’Humanité”

Program of the 5th International Symposium on GSH, Tokyo, 24 January 2009 :

“Forming Consciousness, Changing Cognition For Our Better Global Community”

Prospectus and program for the Second Paris Workshop on GSH, Paris, 2-3

April 2009 :

“Formation of Consciousness, Change of Cognition”

Articles

Hideaki NAKATANI,

Ébauche d’une science généralisée de l’homme

Michael WITZEL,

Change of Consciousness in Siberian and South Asian Shamanism

Jean-Louis DESSALLES,

In praise of resemblance: Human communicational universals as basis for mutual acceptance

Dominiuqe LESTEL,

L’étude des communautés hybrides homme/animal à l’interface de l’éthologie et de l’ethnologie



TOKYO March 2010

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

3-11-1, Asahicho, Fuchu, Tokyo

Generalized Science of Humanity Series, Vol. 5

Tokyo, March, 2010

Editorial Board

Hideaki NAKATANI (Editor-in-Chief, ILCAA)

Koji MIYAZAKI (ILCAA)

Makoto MINEGISHI (ILCAA)

Kohji SHIBANO (ILCAA)

Christian DANIELS (ILCAA)

Maurice AYMARD (Maison des Sciences de l'Homme)

Motomitsu UCHIBORI (University of the Air)

Michael WITZEL (Harvard University)

Jean-Louis DESSALLES (ParisTech)

Published by :

The Joint Research Project "Elaborations of Generalized Science of Humanity", Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534

Tel. +81.42.330.5600 Fax. +81.42.330.5610

E-mail kenkyu-zenkoku@tufs.ac.jp

Table of Contents

<i>Avertissement</i>	1
----------------------------	---

Brief Communications

Yoshiro IMAEDA, The Encounter of Buddhism with Europe. (in Japanese)	3
Aperçu et programme du premier Colloque SGH à Paris, Paris, 25-26, mars 2008 : "Ecologie des transferts épistémiques dans la constitution d' une Histoire de l'Humanité"	5
Program of the 5th International Symposium on GSH, Tokyo, 24, January 2009 : "Forming Consciousness, Changing Cognition For Our Better Global Community"	10
Prospectus and program for the Second Paris Workshop on GSH, Paris, 2-3 April 2009 : "Formation of Consciousness, Change of Cognition"	11

Articles

Hideaki NAKATANI, Ébauche d'une science généralisée de l'homme	15
Michael WITZEL, Change of Consciousness in Siberian and South Asian Shamanism	25
Jean-Louis DESSALLES, In praise of resemblance: Human communicational universals as basis for mutual acceptance	65
Dominiue LESTEL, L'étude des comunautés hybrides homme/animal à l'interface de l'éthologie et de l'ethnologie.	75

目 次

緒 言	2
-----------	---

短 信

仏教と西洋との出会い	今枝 由郎 ... 3
第1回総合人間学パリ・ワークショップ 「人類史構想のための知識交換の生態学」の概要	中谷 英明 D. レステル ... 6
第5回総合人間学国際シンポジウム 「意識を作る・認識を変える」について	中谷 英明 ... 8
第2回総合人間学パリ・ワークショップ 「意識の形成・認識の転換」の展望	中谷 英明 ... 13

論 文

総合人間学素描	中谷 英明 ... 20
シベリア及び南アジアのシャーマニズムにおける意識の転換 (英文)	ミヒヤエル・ヴィツェル ... 25
類似の効用：相互受容の基盤としての人の会話の普遍性 (英文)	ジャン＝ルイ・デサル ... 65
動物行動学と人類学のインターフェイスとしての人・動物共生社会の 研究 (仏文)	ドミニク・レステル ... 75